

壺屋焼物博物館のできるまで

—展示シナリオの作成を中心に博物館の完成と課題を振り返る—

越 真澄

1 はじめに

壺屋から沖縄を考え博物館づくりを考える契機に

私にとって壺屋の仕事は大変思い出深いものです。今でも思い起こすほどに、壺屋の仕事が、沖縄の歴史・文化を勉強する全ての原点になっていた、との思いが強くなります。

壺屋焼を取り上げるためには、背景となる琉球・沖縄の歴史、日本との関係—近世・薩摩との関係、近代化の過程、戦争との関わり等—、さらに本土資本の流入や開発等現代的課題までを視野に納める必要があります。また、諸外国との交流史を見渡し、考古学的成果からその発達を捉え、「琉球の富」と呼ばれた沖縄独自の文化の数々を振り返り、さらに人々の暮らしの中で息づいてきたその機能や用途、生活との関わりを再検証するなど多角的な視点が必要でした。沖縄の風土を実地体験として感じさせていただいた多くの方々との触れ合いも含め、沖縄を捉え、考える数多くの引き出しがここにあったと考えています。

また、壺屋焼物博物館をつくり上げる過程で考えられた課題が、現代の博物館づくりの課題に通じる多くの示唆を含んでいたことを改めて感じます。例えば、博物館に求められる今日的役割、地域とのつながり、文化・観光の振興、市民参加等。さらに、博物館づくりや展示づくりそのものについても。

展示は館の顔—そして活動の第1ステップ

近年、博物館の目指すところは、文化財公開の場から地域文化の創造・生涯学習拠点へ、また、地域活性化という行政課題を担う集客施設へと多様化の道をたどっています。こうした設立の目的・役割の変化の中にあっても、展示は常に博物館の顔であり、その館の性格や個性を訪れる人たちに端的に伝えるものでなければなりません。

そして、「展示」があることが、博物館と他の社会教育施設（図書館・公民館等）との最も大きな違いです。常設展示を中心に、企画展示や特別展示があり、さらにイベントなどの形で学習の動機づけが常に用意され、調査・研究の裏付けを基に、情報提供や交流促進といった学習支援活動が整備されている施設は博物館だけと言って良いでしょう。

来館者が先ず最初に博物館と出会い、最も身近に接する場、それが「展示」です。この展示をきっかけに、来館者が興味を広げ、次なるステップへと歩を進めてくれるのか、館と来館者とのより深い豊かなつながりへと継続的に導いていくことができるのか…。展示づくりに携わるほど「展示」の完成は、博物館が開館し、出発する、そのスタート台だ、という思いが強くなっています。

開館後、博物館が博物館として生き活きと活動していくための土台となり、人々の出会いと交流の舞台として訪れる人たちそれぞれの心の糧とな

る展示を形づくることができたのか、その期待と反省を込めながら壺屋焼物博物館の完成までを振り返り、展示づくりをたどってみたいと思います。

2 展示ストーリーづくりとその変遷

基本路線をつくるのが仕事

私が壺屋焼物博物館の計画に最初に関わったのは、1994（平成6）年、基本設計のためのプロポーザル資料の作成時でした。それから4年の歳月をかけて、基本設計、実施設計、展示工事が完成していきます。

この業務の中で、私は、プランナーという、一般には余り耳慣れない職種で展示に携わらせていただきました。では、プランナーとはどのような仕事をする人々なのか……。展示づくりの出発点において、社会的動向や上位計画の分析などを基に博物館の方向性を検討し、展示については、展示の目的、テーマを明確にし、扱うべき展示内容について学芸員の方たちや研究者・専門家の方たちからの成果をいただき、具体的な展示制作に効果的に変換していくための基礎的な翻訳作業をする役目、とでもいえるのでしょうか。展示ストーリーや展示の内容・構成のたたき台をつくり、空間計画や各展示メディアの演出計画と連動することで、全体として相乗効果をあげ得る基本路線を敷くことが先ず第一の大きな仕事となります。

展示ストーリーの変遷には館の方向性が見える

今日の博物館の展示は、館側が来館者に伝えたいと考えるテーマやメッセージによって紡がれたあるストーリーに基づいて構成されていきます。展示ストーリーに関して、壺屋焼物博物館では、

基本設計のたたき台となったプロポーザル提出案、基本設計、実施設計、さらにその後の調整・見直しというエポックを経て開館へとこぎ着けました。これらの変化を見ることは、館として何を伝えるのか、という博物館の根本的な姿勢をかいま見ることにもつながると思われま

す。そこで、以下に、展示がどのようにつくられていくのかという流れも含め、壺屋焼物博物館の展示ストーリーの変遷を概観し、その過程で重ねられた変更点・留意点等を書き留め、今後の博物館活動について考えるヒントを探る作業を進めたいと思います。

基本設計のたたき台として一プロポーザル案

プロポーザルの結果、乃村工藝社が選定され、私も設計担当の一員としてプロジェクトに携わることになります。その際作成した展示ストーリーが図1です。これが展示設計を検討していく第一段階でのたたき台となりました。

現代との接点を意識

ここで、この第一案を形づくる前提として掲げた博物館計画に対する基本的考え方を振り返っておきます。

計画の背景として、1682年の壺屋への統合以来の歴史、柳宗悦に全国一と推された伝統、地域に残る文化財や歴史・自然景観など潜在的な魅力を持つ壺屋が、都市化の進展とともに煙害問題や新規住民とのあつれきなどの悩みを抱え、地域の持つ歴史的価値や文化的意義の重要性を失いつつあること、これに対し那覇市は、「ヤチムンの里づくり」などの上位計画によって歴史的文化的遺産を活かした地域の再生を目指していることを把握。

こうした現状と課題を踏まえた上で、基本方針として、地域の再生と活性化を最重要課題と捉え、上位計画・周辺計画との整合を図りながら、現代社会（現在）と関わりを持ち続けつつ成長発展する博物館を目指したいとしたものです。

ややもすると現在の社会や生活とは縁遠い存在になりがちだったこれまでの博物館。しかし、地域博物館としての壺屋焼物博物館には、市民や関係団体、研究機関等各所と連携しつつ、地域固有の特性を集積し、新たな創造へと結びつけていくことで、地域自体の将来展望と密接につながっていくことが求められているのではないか、という考え方です。

現代に生きる博物館づくりのために、具体的な展開としては以下のような提案を行っています。

- ・ 展示環境には「琉球の富」と賞された歴史と伝統に裏付けられた美意識を反映、来館者層ごとのきめ細かな展示を想定する
- ・ 活動には住民参加型を志向し、窯業関係者と共に一般市民の参加を促し、交流の場を生み出すことで、地域活性化という課題の共有化を図る
- ・ エコミュージアムの視点を採り入れた整備を図り、地域とのつながり・活性化を具現化していく

これらの考えは当然展示とだけ結びつくものではなく、全体計画の中で、構想から設計へとつながる底流として息づいていったものと認識しています。

こうした考えの下、展示ストーリーは、大きく「壺屋前史」「壺屋焼—その用と美—」「壺屋焼と現代」の3ゾーンを設定。「壺屋焼—その用と美—」の中心となる「琉球の美」では、名品・優品の実物展示と、壺屋焼の歴史と特徴を紹介する複合演出シアターの展開という二重構造を核にテーマを集約、「現代の壺屋焼」を常設展示のエンディングとして、周辺地域へと出発していくという構成でした。

もちろんこの段階では建築の規模や実物の有無、資料の存在などは明らかではなく、入手し得る文献資料を頼りに魅力化を図ったテーマとストーリーづくりでした。ここから再度基本設計段階として何を語るべきかの再考がなされた訳です。

基本設計—生活との結びつきを重視し再構築

基本設計段階では、館全体のねらいを確認するとともに、展示テーマの設定、展示ストーリー（基本シナリオ）の作成、展示構成とゾーニング、

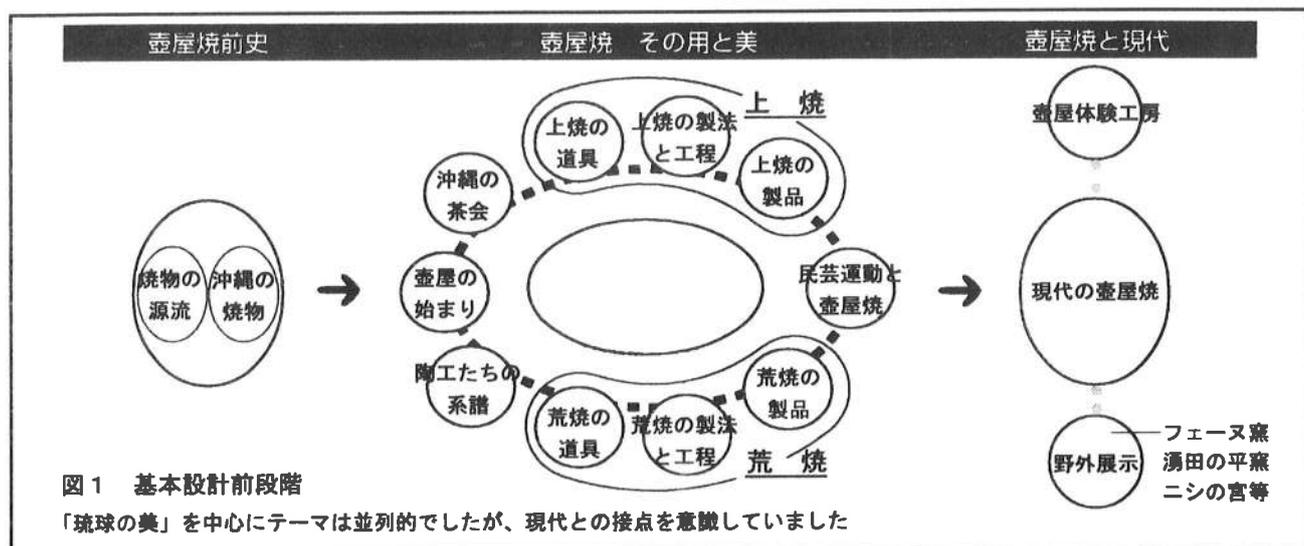


図1 基本設計前段階

「琉球の美」を中心にテーマは並列的でしたが、現代との接点を意識していました

採用する展示諸技術の設定などが必要となります。中でも設計の初期の段階では、空間計画や演出計画に先だち、先ず情報の受け手、即ち来館者に何を伝えていくのかを検討し、テーマの軽重を判断することが重要です。この基本設計案の策定のため、県内各分野の専門研究者を中心とした展示検討委員会が設けられ、討議が重ねられました。

検討委員会では、先ず初めに博物館の性格、事業方針、これらに沿った事業内容について確認されています。館の理念となる視点は4つ。

1. 文化観光の視点
2. 地域コミュニティ形成の視点
3. 国際化の視点
4. 陶磁史研究の視点

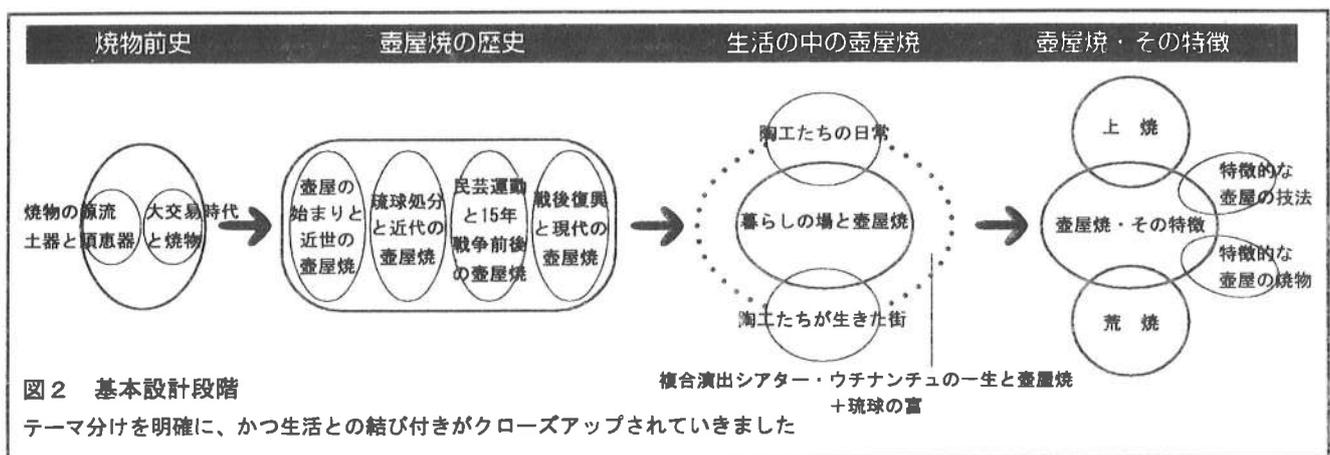
展示案の作成も、こうした館の理念を理解したうえで進められなければなりません。また、ここでは、伝統工芸館との差異化を図ることが大前提とされました。

委員会での要望は、先ず、生活と密着した展示を押し出して欲しい、という点でした。製品の日常生活での使われ方とともに、壺屋焼の歴史を陶工たちの生活とからめて描けないかという指摘もなされました。一方で沖縄の焼物史の系譜と壺屋

焼の位置づけを考慮し、歴史の流れ、諸外国の影響についても語らねばならないという指摘、さらに、壺屋焼そのものを深く探っていく内容についてもストーリーの中で整理していくことが求められました。また、民芸運動を独立したテーマで扱うかどうかといった点などについてもスタディを重ね、この結果、図2のように、「歴史」という時間軸に沿った流れと、「生活」という空間軸の設定による展開、そして「焼物・技」そのものへ焦点を当てる展開という形でテーマ構成が確定していきました。

この段階での変化は、日常の中での壺屋焼の姿が大きく立ち現れたという点です。それに伴って、焼物に関わる「人」の姿がより鮮明に浮かび上がってきたように思われます。これは、他の言い方をすれば、壺屋焼に対する外部からのまなざしを、内側から発する視線へと転換させていった作業でもあったと思えます。

特に、時代的には民芸運動によって壺屋焼が再評価された昭和10年代という設定でしたが、陶工たちとのつながりを重視した「暮らし」の視点が明確に位置づけられたことが、その後の展開への重要な鍵となったと言えるでしょう。



空間の洗礼を受けてストーリーが生きる

こうして定まったストーリーを、建築というステージに重ね合わせる空間デザインの作業が加わり、展示空間に、「時代の小経」（スージーグワー）を抜けて民家の裏庭に至るというドラマ性が加わりました。さらに民家を実物大で再現することにより、民家内部の生活の視点から、シーサーや瓦と連動させた焼物の特徴ゾーンへと、1階から2階への視点移動を活かしてテーマを変化させるという効果が生み出されました。

この暮らしの場の再現という展示方法は、空間的な結節点となるとともに体感的な理解や、季節ごとの可変展示の場という側面、さらに、シアターの環境として人々の生活の舞台を表すという大きな意味を持つものとなりました。

残された課題・詳細を決める資料・実物は・・・

ストーリーの大枠が決まっていく一方で、伝統工芸館との差別化を前提に、当館では歴史上の事項として現代を扱うものの、その扱い方をどうするのか、また、次なるステップ、ストーリーの主役となるべき展示物や必要な資料の確定はなかなか進まず、実施設計以降の懸案事項として積み残されていきました。

実施設計～施工

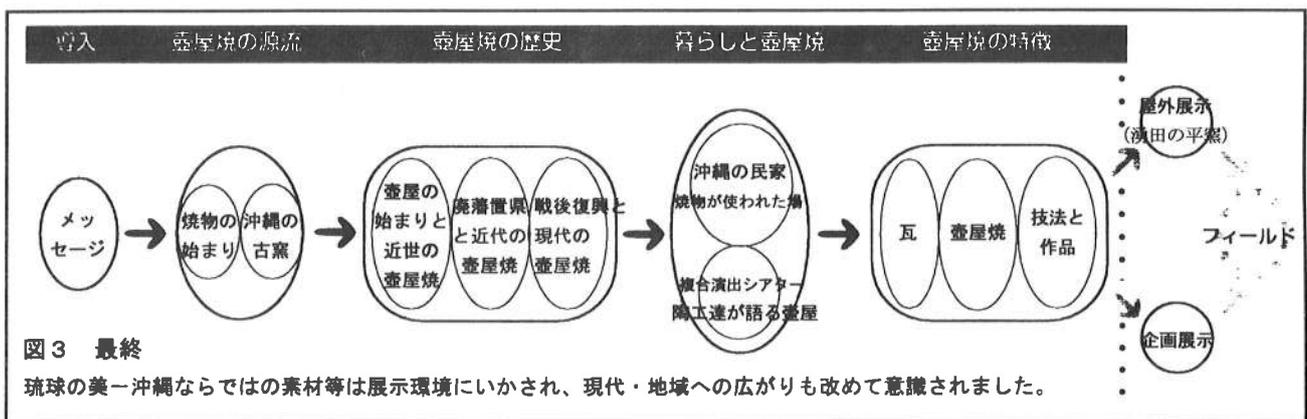
実施設計では、固まった展示ストーリーを基に情報内容をさらに吟味し、項目・細目を階層化して資料や実物との関係を体系的づける展示構成リストを順次詰めていきます。ここでは展示物や各展示メディアの詳細が決定され、制作へと受け渡されていきます。

この段階で展示シナリオに影響を及ぼしたのは、ニシヌ窯の出現と待望の館長の登場でした。

ニシヌ窯は、発掘現場で見たその全容、焚き口の焼けた色とともに、展示を待つ剥ぎ取りを見た時の強い印象を良く覚えています。焼物の破片がザクザクと突き刺さったその形状はこれまでに全く見たことのないものでした。建築のご苦労も含め、展示においても空間を含めまた一段の再考が必要だったものの、この壺屋の歴史の証言者が、発掘された場とほぼ同位置に展示され1階と2階とを結んだことは、場の持つ力と実物の持つ力が相まって求心力が生まれたエポックだったと思えます。

博物館理念の具現化

そして1996（平成8）年準備室長となった現館長との打合せを進めさせていただく中で、展示項



目にもいくつかの組み替えや付加などの変更が生まれました(図3)。これらは館の考え・方向性を明確にするための大きな修正であったと考えています。

個々の項目については置くとして、全体としての大きな変化は以下の3点に集約されます。

- 館の意志を表す「テーマ」を明示する
- 現代とのつながりを示す
- 地域とのつながりを具体的に採り入れる

これらは、展示の中では相互に関係しあって展開されていきます。

まず、なぜ今壺屋焼物博物館なのか、そもそも焼物とは何なのか等、当館の理念を、来館する方々に先ず初めに示すべきなのではないか、しかし展示を通して結果として何を感じ持ち返るか、その結論は来館者一人一人の心に委ねよう、という趣旨が話し合われました。

また、社会全体の価値観やライフスタイルが変化する中で、壺屋、そして壺屋焼はどう変わったのか、その占める位置はどう変化したのか。現代生活と壺屋との関わりを焼物を通して語ることが館としての一つの問題提起となる、という考えが示されました。

さらに、シアターについても、地域とのつながり、現代との接点という視座を持つ形となりました。人・暮らしに焦点を当てていくという検討を重ねた結果全面的に採り入れられた地域の人々の参加は、ベテランの陶工から若手まで、女性も含め一人一人が壺屋のこれまでとこれからを生き生きと語ることで、豊かなメッセージの発信に成功していると思います。住民参加に代表されるこうした展示内容の実現は、一重に博物館理念の具現化を目指したものと言えるでしょう。

地域の人々との触れ合いの空間、また外来者への地域情報の提供の場として、現在のゆんたくコーナーも生まれました。そして、壺屋焼の特徴をどのような製品・作品に託して語るのか、その実物の選定も進みました。

必要だった意思決定・推進責任者

博物館は過去を振り返り未来を考えるもの、現代との接点は避けて通れないもののはずです。市民とともに現在を考え将来像を探るためには、そのよって立つ地域とのつながりを抜きに考えることはできません。地域の現状・課題・将来像を見据えていくという考え方、そのために地域とのつながりを大切に捉えるという視点は博物館計画の当初からのものではありませんでした。しかし、これを確実に定着させていくためにはやはり責任を持った意思決定者の存在が如何に大切か、展示の最終的な修正を通じて痛感した段階でもありました。

3 結びに

準備体制の必要性そして「博物館なれど準備室」

展示は、本来それまでに積み重ねられた調査・研究の成果と蓄積を基に構成されていくべきものです。展示設計に携わる者は、こうした貴重な成果をいただき、何をどのように伝えるのか、館と来館者とのより良いインターフェイスを考えて、効果的な情報構成・表現・環境づくりなどを提案していくことが使命であると考えます。そのためには、やはり早い段階での学芸職員の方々の配置や準備室の立ち上げなど、責任ある推進体制の整備がぜひ必要だと言えるでしょう。

「準備室なれど博物館」、これは、最初の学芸員

の採用から8年という準備期間の蓄積を、展示づくり・博物館づくりに活かしたことで有名な滋賀県立琵琶湖博物館のキャッチコピーです。開館後も、「博物館なれど準備室」を掲げ、リニューアルまで視野に入れた中長期計画を作成、活動の蓄積を重ねています。

壺屋焼物博物館も、博物館づくりの経緯を活かし、これからの活動をぜひ次なるステージへとつなげていただきたいと期待します。

理念を実現できる展示づくりを目指して

これまで見てきたように、展示づくりは、その骨格となる展示ストーリーの作成にも多くの検討・討議が必要です。その上で、詳細内容の確定、展示手法や空間構成の決定、各メディアの詰め、製作など多くの人たちの連携・共同作業が必要となります。

壺屋焼物博物館の展示完成までの経緯を振り返るとき、博物館関係者も含め、こうした展示に携わる多くの人々が常に立ち帰れるしっかりした理念の構築の必要性を感じずにはられません。その上に展示の方向性を重ね、理念が理念だけに終わらず展示の場にも生かされるよう、今後も努力を重ねたいと考えます。

展示から地域へ・地域とともに生きる博物館

21世紀、新しい世紀は新生の時代。地域には文化の核があってこそコミュニティのバイタリティーが生まれると信じます。

地域と結び、展示づくりを通して博物館への住民参加を実現してきた「壺屋焼物博物館」。今後も、現代に生きる利用者と密接に関われる博物館として、地域の文化と暮らしの接点を探り、新し

い活力を生み出す「場」となることが期待されます。そして、地域へ広がるエコミュージアムの充実にぜひ実現していただきたいと思います。

最後に、展示の完成に向けて、深夜遅くまでパネルの一字一句を吟味し精査した思い出を込め、壺屋焼物博物館の展示が、これからも地域への広がりステージとなり活動の起点となり続けることを願いながら、もう一度館のメッセージを噛みしめたいと思います。

「この展示を壺屋のまち並みにつなげていただき、壺屋焼と沖縄の焼物のこれからの考えていただければ幸いです」

壺屋焼物博物館の常設展示準備を振り返る

仲尾次 潤

はじめに

1997年3月末、私は学芸員への職名変更と焼物博物館準備室への異動の内示を受けた。当時の私の心境は、「学芸員」という携わってみたいかつた職につけるうれしい気持ちがある反面、準備室がどのような状況にあるのか理解していないことと、学芸員として業務を行っていく準備ができていない、という不安があったのが実際であった。同じ教育委員会に勤務していたので、壺屋に博物館を作ること・準備室の設置・展示資料がない・学芸員もいない、でも98年の2月には開館予定である、ということは知っていた。しかし、それ以外のことは知らなかったし、何より壺屋や焼物のことについて、ほとんど勉強していなかったからである。

そのようななか、準備室長（以下、「室長」）と城間技査（以下、「技査」）から「4月は、学芸員の定数職員は君一人になる。そのため常設展示に関する窓口は、君が担当になる。異動前だけ常設展示監修委員会へ同席して欲しい」との連絡を受けた。その日、私は教育委員会会議室で監修委員に紹介され、また展示工事の施工業者である乃村工藝社の上原裕氏（以下、「上原氏」）・プランナーの越真澄氏（以下、「越氏」）と顔合わせをすることになった。その席で、12月半ばには展示工事を終えなければならないことを改めて知らされたのである。

4月、準備室に異動した私は、室長と技査から業務についての説明を受けた。担当する常設展示に関する主業務は、①五つあるゾーンのうち、Aゾーンの「沖縄の古窯」からB・Cゾーン、Dゾーンの「壺屋焼の製法」の部分について、②複合演出シアターソフト制作について、③展示工事のうち、情報系の作業についての乃村工藝社との連絡調整、④常設展示監修委員会の開催、の四つであった。展示工事全体をみてきた技査からは「展示工事には、展示ケースや室内の内装と併せて、映像展示のソフト・パネルやネームプレートの作成・資料の展示作業等も含まれている、君の仕事は展示に関するソフト面をまとめてもらうことだ」との説明があった。そして、展示ストーリーや展示の展開プランを理解するために、『壺屋焼物博物館展示基本設計』と『壺屋焼物博物館展示実施設計（以下、『実施設計』）』に目を通すよう助言をもらった。

こうして私の準備室勤務は始まった。以下では展示工事終了までの作業を中心に記していく。

複合演出シアター(1)

シナリオ構成案作成作業

97年4月の段階における複合演出シアターソフト制作に関する進捗状況は、ほとんど振り出しに戻った状況にあった。前年中に、室長の提案で、『実施設計』に示された展開プランを白紙にし、